

ミャンマーの先輩に問う!

このコーナーでは、MYANMAR JAPON代表の永杉が毎回、ミャンマーの第一線で活躍するリーダーと対談し、「現代ミャンマー」の実相に迫ります。

第3回
在ミャンマー
日本国大使館付属
ヤンゴン日本人学校
置田 和永 校長

今回のテーマ 今、生徒数が急増するヤンゴン日本人学校は



置田 和永

在ミャンマー日本国大使館付属
ヤンゴン日本人学校 校長

おきた・かづなが☆1950年岐阜県生まれ。高度成長時代に脱サラし、教員になる。75年に大津市瀬田中学校で初任。海外では30年前、イラク・バグダッド日本人学校で教鞭を取る。バグダッドではソ連製旧スカッドミサイルを28発体感。戦争では、何も国際的問題は解決できないと身をもって知らされる。岐阜県で退職後、文部科学省シニア派遣として当地に2012年春より赴任。著書『僕の細道』、趣味は溪流釣り。座右の銘は『自然体・怒』。

ヤンゴンで生活する日本人の子ども達が急増中

永杉 本日はお忙しい中、お時間を頂戴しましてありがとうございます。まずは現在のヤンゴン日本人学校の概要や特色について教えてください。

置田 ヤンゴン日本人学校は、タイ・バンコクに次いで世界で2番目に歴史があり、来年2014年6月で創立50周年を迎えます。幼稚部・小学部・中学部すべてをまかなっており、現在の在籍数は幼稚部入れて8月末現在おおよそ100名。小・中学の児童生徒数は一昨年までは40～50人ほどの在籍でしたが、現在は85名です。近年の民主化で日系企業の進出にともない、急激に増えました。教室や先生の数などを考えても、今やパンク寸前です。

駐在員のご家庭のうち2、3割は、外国人も通う「インターナショナル校」を選ぶようです。現地のローカル校もありますが、現状ではほぼ日本人学校を選択されます。3、4年で日本へ帰任される方が多いため、子どもを安心して預けることができるからでしょう。今は入学時期に関係なく、問い合わせは絶えません。(事実、対談取材中、土曜日にも関わらず問い合わせの電話がかかる)

特色として、他国の日本人学校と比べて異なるのは、現在おおよそ5割がミャンマー人と日本人とのハーフ、ということ。ハーフの子たちを私たちは「ダブル」と呼んでいます。日本人と結婚されるミャンマーの方は、日本にアコガれを持っている人が多いようで、子どもを積極的に日本の学校へ通わせ

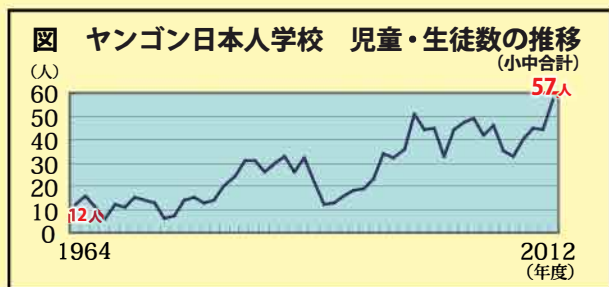
ていますね。ダブルの子どもたちは、「国境なきグローバル人材」として将来は日緬だけでなく、国際舞台で活躍していく有能な人材だと考えています。

魅力的な教育の陰に潜む現状から見える課題とは

永杉 なるほど。「ダブル」で思い出したことがあります。私が以前上海に居住していた頃、現地の日中ハーフの女性社長からこんな話を聞いたことがあります。私は幼い時分日本の小学校に通っていたのだが、友達からハーフと呼ばれることにとても負い目を感じていた。しかしあるとき担任の先生から、君はハーフではなくダブルなんだよ、と優しくアドバイスをもらったそうです。ここから彼女は今までとは180度転回させた自信に満ちた生活を送ることができた、だから今の人生がある、と言ってました。毎回お酒を飲みながらですが(笑)

さて、校長は今まで数多くの児童生徒や、親御さんをご覧になっていて、求められるものは何だと思われますか。また、現在の抱える課題とは何でしょうか。

置田 力を入れているのは「学力の向上」と「国際性」の2点です。学力に関しては、きめ細かな指導を基本にしてい



児童生徒数は現在85人に。おそらく4、5年後には200人を超え、10年後には300人から500人の増加になるのではないかと置田校長。校舎の広さ等の問題から、移転も遠い先の話ではない。

表 特色ある③活動

1. 現地理解教育	ミャンマー伝統文化の鑑賞、ヤンゴン市内の買い物や探検、見学などを通じ、ミャンマーの人・もの・文化への理解を深める。
2. 言語活動の充実	すべての生徒に英語・ミャンマー語を指導する他、週3回の全校朝読書、言語が日本語以外の生徒への日本語の補充指導も。
3. チャレンジタイム	ヤンゴンでは家の外の遊びが制限され、運動不足になりがちのため、月曜朝の時間を使い、なわ跳びや、竹馬、一輪車の技などに挑戦。

(ヤンゴン日本人学校 HP より)

今年5月24日の安倍首相ミャンマー訪問時に本人直筆を頂戴し、制作された門標をバックに



世界で2番目に古い日本人学校 ミャンマー発展の中に課題あり——

ます。日本人学校の先生というのは、各都道府県の選抜を通り、なおかつ文部科学省で選ばれた人たちなので、指導能力の高い、優秀な人が多いです。また、国際性を身につけるために、まずは英語の授業を小学校1年生から2時間取り入れ、日本で学ぶ生徒より早く語学への慣れや習得を狙います。

ただし、大きな課題は2つ挙げられます。1つは生徒数の急激な増加によって、先生が足りません。生徒数から考えれば、本来は15人の先生が必要なところを10人で教え、先生の奥さんにもサポートしてもらい、カリキュラムをこなしている状況です。

2つ目は、校舎の建て替えなどの資金不足の問題です。今後、増加の傾向を考えれば、手狭なのは目に見えています。日本政府からの予算では足りないため、日本企業に呼びかけ、何とか当面の資金は目途がたちました。しかし、数年後の対応に向けて今から動く必要があります。現在は資金確保のために、ミャンマーや日本へもお願いに回っているところです。校長の任期は3年なので、

さまざまなかじ取りは難しいですね。

国際舞台で活躍できる人材へ ヤンゴンで学ぶ意義は大きい

永杉 優秀な先生方の力は、1+1が3にも4にもなりますね。教育へのサポートは政府の支援を待つだけでなく、民間企業のバックアップが大事だと感じました。

ところで、私にも3人の子どもがおります。ぜひ教育論をお聞かせください。

置田 子どもたちには、将来の国際舞台で活躍できる人に育ててほしい。その肝の教育は「体験」です。小学校高学年は、紡績工場や農業などの職場を体験してもらい、中学生にはミャンマーの無人島での生活

体験、ヤンゴンから郊外に出て歴史の学習など、ミャンマーの良いところを吸収させています。

もう1点の願いは、日本を知ること。外国にいるせいか、日本人でありながら、日本の文化を知らない子ども達がたくさんいます。そこで、ミャンマーの学校では教えない「音楽」「美術」等の授業を導入しました。しかし、現状、先生方には時間がなく、専門性も備えているわけではないため、難しい。そこで日本人会の力を借りて、芸術教科のボランティアを募集したところ、うれしいことに30人以上集まり、現在は交代で指導して頂いています。縁あって海外で生活している子ども達には、日本とミャンマー両国をしっかりと理解した、国際人材として巣立ってほしいものです。

来年は日緬の外交上も 同校にとっても大事な1年

永杉 まさに、いま日本で盛んに行われている「地域参加型」の支え合う教育ですね。とても感銘を受けます。もっ

と早く認識していれば、わが子も通わせたかったです(笑)

では最後に、今後はどんな教育を行い、ヤンゴン日本人学校のトップとしてかじ取りをされる予定でしょうか。

置田 先ほども述べましたが、ボランティアの先生や企業、日本人会など、いろいろな方々の力をお借りしないと、この学校は成り立ちません。今まで「開かれた学校」を目指し、1つひとつ形になってきたところです。来年2014年には、日本・ミャンマー外交関係樹立60周年を迎え、また本校も50周年という節目に、普段の学校教育だけではない幅広い文化交流を今後、どんどん取り入れていきます。

最後に私のポリシーですが、トップは後姿(背中)が大事です。学校は休日でも、土日も暇はありません。学校のトップである校長がどれだけ教育に熱を入れているかは、保護者もそうですが、現場の先生もよく見えています。日本ですと、公務員は自然と上下関係もできてきますが、特に海外では任期も決まっていますし、利害関係もないだけに、先生は上に座る人の動きをよく見えていますよ。自ら動いて、次の世代の手本になりたいですね。

永杉 ありがとうございます。これからもミャンマーで育つ子どもの成長と安全、そして未来の日本人学校の発展のためのご活躍を祈念しております。



永杉 豊
国際ビジネスアドバイザー

ながすぎ・ゆたか☆学生時代に起業、その後ソウル・香港・ニューヨークに現地貿易事務所を開設する。米国永住権取得後、米国・中国に自ら移住し現地法人や事務所を設立、各事業のM&Aを経て現在はヤンゴン在住。国際ビジネスアドバイザーとして活躍するほか国内外複数の企業の代表を務める。ヤンゴン和僑会(準備室)代表、(社)日本ミャンマー友好協会副会長。